

<シンポジウム詳細>

「原発事故から7年、放射能汚染の状況はどこまで改善したのか」

福島第一原子力発電所の事故により放出された放射性物質の状況は、除染や気象現象などさまざまな要因により、大きく変化を続けています。7年が経過した現在、放出された放射性物質はどこへいったのでしょうか。また、一度汚染された土地で農業はどのように行われているのでしょうか。調査研究を行ってきた研究者たちより、重要な知見を聞くとともに、残された未解決の問題と今後も見張り続けなければならない事柄について、また、科学者と市民そして社会の役割について、参加者全員で考えます。

開催日時 2018年3月10日(土) 13:00~17:30 (12:30 受付開始・開場)

開催場所 日本科学未来館 7階 未来館ホール、コンファレンスルーム 水星・火星・金星

プログラム

第1部 トークセッション / 13:00~14:25 (未来館ホール)

放射能汚染の問題について、これまでの7年間に、どのような研究が行われて何が解明されたのでしょうか。長期的な放射性物質の観測やシミュレーションなどから明らかになったことを研究者からお話しいただきます。

「大気への放出と飛散実態はどこまで解明されたのか？」

事故によって放射性物質は大気中にどれくらい放出されたのでしょうか。各地の空間線量や、放射能をもつ浮遊粒子について新たに掘り出されたデータ、そして事故の後の気象データなどを総合的に分析してわかった、放出と飛散の実態をお話しします。

登壇者:中島 映至氏 (JAXA 地球観測研究センター センター長)

「陸はまだ汚染されているのか？」

私たちが住み、食物を生産している陸地の汚染実態は、事故後7年間でどのように変化してきたのでしょうか。経年モニタリング結果を中心に、放射性物質の河川による移動や、土壤中の粒子の作用による移動、また森林生態系内での放射性物質の循環についてお話しします。

登壇者:恩田 裕一氏 (筑波大学 アイソトープ環境動態研究センター センター長)

「海へ流れ出した放射性物質はどこへ行ったのか？」

事故によって放出された放射性物質の約8割は海洋に降り注ぎました。その後の放射性物質の動きや減少の様子を、海水・海底土のモニタリング結果とともにお話しします。また、懸念されている海底付近に住む生物への影響についても、経年モニタリングの結果を紹介します。

登壇者:山田 正俊氏 (弘前大学 被ばく医療総合研究所 教授)

「農業は復興できたのか？」

農業における放射能低減対策として、有効なカリウム施肥の効果をお話ししつつ、現在農産物の放射能検査体制がどのように敷かれているのか、またこれまでの検査結果はどのようなものなのかについて紹介します。

登壇者:信濃 卓郎氏 (農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター 農業放射線研究センター センター長)

第2部 個別トークセッション / 14:30~15:30 (コンファレンスルーム 水星・火星・金星)

大気、陸地、海洋における放射性物質の状況、放射性物質が農業や漁業に与える影響とその対策などをポスターにまとめて紹介します。各ブースでは、研究者による個別トークセッションを行います。

第3部 全体ディスカッション「これからの課題」 / 15:30~16:30 (未来館ホール)

第1部、第2部で集められた質問やコメントをもとに、登壇者と参加者全体で新たな情報をどのように解釈し、判断にいかしていけばよいのか、また今後どのような調査や研究が必要なのか、ディスカッションを行います。

登壇者: 中島 映至氏、恩田 裕一氏、山田 正俊氏、信濃 卓郎氏

ファシリテーション: 雨宮崇(日本科学未来館 科学コミュニケーター)

第4部 個別トークセッション / 16:30~17:30 (コンファレンスルーム 水星・火星・金星)

第3部のディスカッションを踏まえ、新たに生じた疑問を研究者に直接聞くことができるセッションです。

<パネル展示詳細>

「Lesson #3.11 7年目の選択」

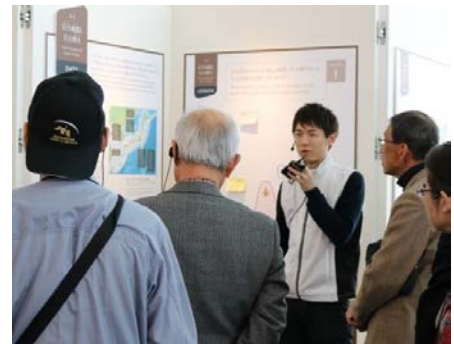
東日本大震災とその後の原発事故について、巨大地震への備え、放射能汚染の現在、エネルギー問題という3つの章立てで、科学的なデータをまとめ展示します。この7年間に、私たち個人や社会が行ってきた「選択」に焦点をあて、これからどのような未来を築いていくのか考える場を創出します。

開催日時 2018年2月28日(水)～4月9日(月) 10:00～17:00

※3/6(火)、3/13(火)は休館

開催場所 日本科学未来館 5階 常設展内

参加費 入館料(大人620円、18歳以下210円)のみ



昨年の Lesson #3.11 パネル展示の様子

パネル展示概要

<巨大地震への備え>

マグニチュード9というハザード

東日本大震災の震源断層面で生じたずれの大きさと全国各地の震源分布を示しながら、いつかどこかで再び発生する地震のリスクを考えます。

自分で守る、みんなで守る

震災後、国や自治体による防災対策だけでは被害を防ぎきれないことがわかってきました。命や財産などを守るため、「自助」「共助」「公助」の必要性について考えます。

<放射能汚染の現在>

減少する陸域の放射性物質／広がり薄まっていく海域の放射性物質

福島第一原子力発電所の事故により放出された大量の放射性物質の汚染状況は、この7年間で大きく変化しています。陸と海の放射性セシウムの拡散メカニズムと現状、さらに農作物や海産品への影響についてのデータを示します。

食べ物の放射能を見張る

日本では震災後、食品中の放射性セシウムの濃度規制として、1 kgあたり 100 Bq以下という基準が定められました。一度汚染された場所でも、放射性物質のとりこみを防ぐ対策を施すとともに、放射能検査を行うことで、安全な食料生産が可能となりましたが、農業は復興したのでしょうか？キュウリや米を例に、現在の測定値と価格などを提示し、考えます。

<エネルギー問題>

なおも高まる化石燃料依存

日本のエネルギー計画は、震災の前、そしてこの7年間にどのように推移してきたのでしょうか。福島第一原子力発電所の事故により浮き彫りとなった、電線の向こう側につながるリスクとともに今後の在り方を考えます。

再生可能エネルギーを育てていく

将来の気候変動への危機の高まりにともない、世界のエネルギーは再生可能エネルギーへと大きく転換しつつあります。震災後の日本も、再生可能エネルギーによる発電量を大幅に増やしていく政策がすすめられています。今後大量導入が進むにつれて課題となっていく「コスト」や「不安定性」にも注目し、現状と今後の展望についてデータを提示します。

サイエンス・ミニトーク「Lesson #3.11 7年目の選択」

パネル展示のトピックスを題材に、未来館の科学コミュニケーターと参加者が話し合い、ともに考えます。

開催日時 2018年2月28日(水)～4月9日(月) 13:30～13:45 ※3/6(火)、3/13(火)は休館

開催場所 日本科学未来館 5階 コ・スタジオ

定員 約40名(当日先着順。立ち見でのご見学も可能です)

参加方法 事前予約不要、直接会場までお越しください。

参加費 入館料(大人620円、18歳以下210円)のみ

テーマ ※開催日により異なります

- ・ 海に流れた放射性物質の行方
- ・ 再び起こる災害にどう備えるのか
- ・ 再生可能エネルギーの弱点を克服せよ